

《進行》 本日はようこそお越しいただきました。ご来場の皆様方にご案内をさせていただきます。携帯電話をお持ちのかたは電源をお切り頂きますかマナーモードに設定して頂きますようにどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日進行を担当させていただきますヒッツ FM ナビゲーターの遠藤尚美と申します。どうぞよろしくお願い致します。(拍手)そして高山市史編纂専門委員の田中彰さんです。よろしくお願い致します。

《田中》 よろしくお願いします。

《進行》 えー、さてひだの匠はいいもんだというこちらのタイトルでございますが、何ともいい感じですね。

《田中》 あの一、ひだの匠はいいもんだというこの今日のタイトル。こちらの方は、えー、2つの意味を込めて、ちょっと決めました。で、ひだの匠っていうとやっぱり言葉の響きがいいんですね。遠藤さん、飛驒の匠という何となく感じがするでしょう。飛驒を表すような。

《進行》 ハイ、代表するとしても素敵な言葉だなと思いますし、あの一、多くの皆さんが興味を持っていらっしゃる所かなというふうに感じております。

《田中》 言葉の響きがいいのもう一つは、この飛驒の匠ってのはすごい長い長い歴史があるんですね。その歴史を今もやはり大事にして伝統技術として持っておられる方はたくさんおるんですね。その方々は、やっぱり飛驒の匠ってのはすごくいいと、そういうあの一考え方を覚えていらっしゃるの、その2つの意味を込めて、このコラムのタイトルを決めたわけでございます。

《進行》 ハイ、そして本日は九名の方がお話をして頂くということですよ。

《田中》 ハイ、そうです。今日はたくさんの方に発表をさせていただきます。皆様方のレジュメのひだの匠はいいもんだのチラシ、こちらの方の順番で九名の方に発表してもらおうと。そういう内容でございます。で、この九人の方に古墳時代からそして戦争中の木製飛行機まで、長い長い間のそういった歴史、そして新しく調べて頂いたその内容を今日は発表してもらい、そういう内容でございます。

《進行》 そして、順番にですね、ご紹介して頂くということですけど、はい。

《田中》 資料もたくさん用意して参りましたので、この資料全部説明はできんかと思えますけども、この資料持ち帰って頂いて、また参考になるんでないかというふうに思います。

《進行》 はい、とても豪華な感じですね。

《田中》 はい、資料を作るのに非常に時間がかかりましたので、この資料は是非また活用してもらいたいとそういう願いを持っています。

《進行》 わかりました、そしてこちらの会場内でございますけれども、お飲み物を取って頂いても結構でございます。またですね、途中休憩をとらせて頂きますのでよろしくお願い致します。本日はたくさんのお皆様方がお越し頂いておりますが、お席空いていると

ころにどうぞお掛け頂きます、ごゆっくりとお話を聞いて頂きたいと思います。私も本当に楽しみに参りましたので、是非皆さんと一緒にですね色々学んでいきたいというふうに思っております。それでは最初の方をご紹介します。田中彰さんとそして三島信さんです。どうぞ、よろしくお祈いします。演題は飛驒匠の通った道ということです。それではよろしくお祈い致します。

1. 飛驒匠の通った道(4:25~)

講師 田中彰・三島信

《田中》 はい、トップバッター、最初、匠の通った道ということで、私と三島さんとお話をさせていただきます。

まずは、皆様方のところに資料をお配りしております。吉島家住宅の、こちらですが、こちらをちょっと見てください。皆様方のところにお配りしています袋をですね、プラスチックの袋、そして切り取るとクリアボードなんかになるという袋の中に資料を入れてありますが、その袋の表紙ですね、その表紙も吉島家住宅のものでございます。吉島家住宅については色々と、この説明文なんかがあるんですが、あそこを訪れております観光客の方に、その説明の内容わかりますかと言ったらわかりませんって言ったんですね、難しすぎて。それで、こういうのを作ったわけです。その部分の説明を写真のところに当てはめて、これでどうですかと見せましたら、これなら分かります、ということで、こういう資料の作り方もあると特に建築の方でね、そういう作り方があるなというふうに思ったわけがございます。やはりあの、建築家、普通の、普通と言いましょか、研究者は文章を読めば分かるんですが、一般の方は難しすぎて分からんと、それではいかんということで、このやはり飛驒の匠の技術を知ってもらうにはこういう方法があるのかなと、こんなふうに思ったというわけがございます。

そして、飛驒の匠街道というこういった資料がございます。これは広げて頂きますと、地図が出てまいります。地図が、この高山から奈良までの道、細かく調べまして、こういった地図ができました。この地図ができましたのは、15年か20年くらい前です。この、第二版になりますけども、こういった地図、今回日本遺産の事業の中で作って頂きました。この、奈良までの道というこの地図は、全国他のところでは作ってないんですね。行政が、やはり、県なら県ですので、自分の県のところの地図は作るけども、他の県のところは作らないということがございますので、やはり飛驒の匠の、この輩出した高山では奈良までの道をこんなふうにするわけがございます。なかなか資料がなかったものですから、非常に苦労しまして作りました。で、滋賀県のほうは結構研究者がおられて、大体分かったんですけど、1番分からなかったのは飛驒の管内です。飛驒管内でなかなか分からなかったということがあるわけです。で特に、下呂。下呂ですね、このスライドにあります下呂からが分からなかった。国道41号は川沿いにどんどん行っておりますので、また高山から荻安峠を超えて、そして上呂まで行く道、それも調べておったんです

が、下呂からどういうふうに行くのか。初矢峠まで、初矢峠ってのは昔から分かっておったんですが、じゃあ初矢峠までどういうふうに行くのかということで、分からなかったんですが、匠学会の皆さんと一緒にまわっておりまして、下呂のはずれの小川という所。こちらですね、この小川、こちらのところでうろうろしていらっしゃいましたら、小川の方が教えてくれました。で、石畳の道はここにあると、そしてわざわざ車で送ってくださって案内をして頂いたわけです。で、この下呂の小川解脱観音の上がり口のところに石畳の道が綺麗に残っております。残念ながら下呂市のほうでは、特にここを整備する予定は有りませんし、そしてまたPRもしていないんですけども、それだけにそのまま石畳の道が改変されることなく残っております。まあ、東山道飛騨支路というね、東山道へと繋がっていく飛騨の道、飛騨支路に石畳が本当にあったのかと、位山にあります石畳の道、あれは本当は後から作ったんじゃないかと、現在。昭和になって作った石畳の道ではないかと。そういうようなことも言われておったんですけども、しかしながら、この下呂のこの小川のところにひっそりと石畳の道が綺麗に残っております。非常に説得力あるこの、道でないかなとそんなふうに思います。そしてこの地図の裏側のほうに、この日本遺産の構成遺産が紹介されております。国府のほうの中世寺院から、高山の色んな飛騨の匠の関係以降、江戸時代の建築、こういったものも全部挙げてもらっております。そしてまた、UNESCOの文化遺産に登録されました高山祭、こちらのほうも、ここに資料として挙げております。まあ、非常に分かりやすいのに、いい資料でないかな、そんなふうに思うわけでございます。この飛騨の匠100人が平安時代の終わりくらいまで、通った道ですね、この道のこの行き先、奈良の平城のほうまで行ったんですが、平城宮のほうに、この飛騨の匠あるいは奈良時代に作りました建物が唯一残っております。そこをこれから三島さんにちょっと紹介してもらおうと、そういうことでございます。じゃ、三島さんよろしくお願ひします。

《三島》 はい、三島でございます。田中先生の後という重責ですけれども、私のほうから難しい話もできませんので、踏み込んだ話もできませんけれども、古代の制度としての飛騨の匠は徴用されて、どういった建物を建てていたかということ、唐招提寺とこんどうという、講堂というところから紹介したいと思います。ご存じのように唐招提寺は古都奈良の文化遺産として近くの薬師寺や東大寺と共に世界遺産に文化、世界文化遺産に登録されております。唐招提寺は律宗という宗派の総本山となっております。律宗とは南都六宗と歴史の教科書では必ず出てきて暗記をさせられる南都六宗、三論成実法相俱舎華嚴律、そのうちの律宗という宗派の総本山となっております。ただこの南都六宗というものは現在の浄土宗や浄土真宗、臨済宗といったように、それぞれ仏教内において異なる教理や信仰を意味している、また宗祖、開祖といったものがあるといったような現在の教団組織といったような仏教宗派ではございませんでして、どちらかという三論宗でしたら、三論、中論、百論、十二門論という浄土の論集を学ぶ学派というグループといったような感じでございます。現在でいいますと大学の学部や学科のようなものがそれぞれ南都六宗と思って頂ければいいかと思ひます。その中で唐招提寺とは、律宗でございます。律宗

とは、字の如く戒律の研究や実践をするグループでございます。

今回は、ただ1つ皆さん今度奈良行った時に是非この建物、唐招提寺のこの建物を見て頂きたいということだけをお話し致します。その建物が、唐招提寺の講堂という建物でございます。この建物は実は平城宮の唯一の遺構であると言われております。講堂は平城宮の東朝集殿という建物を移築して現在唐招提寺の講堂として建っております。現存する唯一の平城宮の宮殿建築でございます。そういった意味で大変貴重な建物でございます、現在国宝にも指定されております。朝集殿というそもそもあった朝集殿という建物は奈良時代役人が出勤致しまして、身支度をしたり衣類を整えたりするような、そういった控えていたりする場所でございます。元々は壁や建具などが朝集殿では無かったので唐招提寺へ移して、寺院用に改造するにあたって建具なども入れたりして寺院の建物として整備しております。奈良時代に大変大きな改造がございまして、現在見える外観はほとんど奈良時代の改造でございますけれども、柱材なんかも材はほとんど創建当初のものといわれております。このように平城宮の唯一の遺構ということで、たとえば法隆寺なんかは世界最古の木造建築といわれておりますけれども、実は今建ってる法隆寺の建物は聖徳太子が実際目に触れたというものではございません。太子没後焼けまして、今建ってるものはその後再建された建物でございます。ただそういった意味では再建されても尚、世界最古の木造建築というのが法隆寺の凄いところでございますけれども、この唐招提寺も鑑真和尚が建てられたお寺であることは皆さんご存じかと思っておりますけれども、例えばこの唐招提寺その柱を1つとってみてみましても鑑真和尚は大変苦難の末日本に渡航されておりますので、目が見えないということですので鑑真和尚は当時この講堂の柱に手探りで頼りながら歩いていたということもあろうし、飛騨の匠が朝集殿から移築する際にここに新たに講堂として整備する際にですね、鑑真さんは目が見えませんが耳をすまして飛騨の匠が木斧で削る音とか木槌で打つ音を聞いていたのかもしれない。そういった意味で大変この唐招提寺講堂というのは飛騨の匠のかおりが残る建物でございますので、皆さんまた今度奈良へ行くような機会がございましたら唐招提寺に是非訪れて頂きまして、この講堂を見て頂けたらと思います。簡単ではございますけれども、私のほうからは飛騨の匠のかおりが残る唐招提寺講堂についてお話しさせて頂きました。ありがとうございます。(拍手)

《田中》 はい、三島さんありがとうございます。

《進行》 ありがとうございます。実際に奈良に行って見てみたいという気持ちになりましたね。ありがとうございます。

《田中》 じゃあ次の方、登壇をお願いします。

《進行》 はい、2人目は牛丸岳彦さんです。では、牛丸さんのご紹介をお願いします。

《田中》 その前に、今の唐招提寺講堂の話ですけども、藤原宮、平城宮そちらのほうの建物ってのは、都が変わる時に引き抜いて解体して次のところへ持ってったんですね。で、そういうようなものですから建物が残っていないわけです。平城にしましても、都が移っ

てしまうと平らなところになってしまう。水田になってしまう。ということで、建物がほとんど残っていない中で、この唐招提寺の講堂のほうは残り続けたということで非常にいい建物だと、そんなことで紹介をして頂いたわけでございます。

《進行》 ありがとうございます。

《田中》 今度は牛丸さんなんですが、牛丸さんの紹介をしますが、古墳といえばやはり牛丸さんということで、古墳の第一人者でございます。この古墳の被葬者はということで、非常に難しい話を押しつけて、本当に被葬者が分かるのかどうなのかということをやっと思いながら喋ってくれと、そんなことでお願いをしたわけでございます。

《進行》 はい、それでは、2人目は牛丸岳彦さんです。演題は飛驒の古墳の被葬者でございます。よろしくお願ひ致します。

2. 飛驒の古墳の被葬者は(19:44~)

講師 牛丸岳彦

《牛丸》 過分なる紹介いただきまして誠にありがとうございます。私は高山市役所の文化財課に勤めております牛丸岳彦と申します。本日は本当にこの足元のいい中こんなにたくさんの方にお越しいただいて本当にありがたく思います。短い間ですのであまり余分なことは言わずに下らん話は止めておいてどんどん先に進みたいと思います。たまにしょうもないことも言いますので笑うポイントかなと思ったら笑ってもらって結構ですのでよろしくお願ひいたします。ここは飛ばしましょうか。

今日は、一応4つほど項目を出して参りました。私の資料はA4縦、A3を2つに折ったA4縦になっておる資料でございます。ありますでしょうか？あの、藁半紙みたいな資料でございます。はい、一応タイトルのあるページは1ページ目としまして、ここは駄文ですので暇な方は読んでください。中を開くと、見開きで1つの図になっております。こちらは非常に私も頑張って作ったものですので、大体このページを見ながら、今話してる古墳はこの辺にあるなあなんてことを、一応左側に飛驒の古墳の編年を載せておりますけども、この辺を見ながら聞いていただければありがたいかと思います。一番最後のページはおまけみたいなもんですので、時々1回位はここへ飛んでくださいという話をするかもしれませんが、その時はこの一番最後のページをご覧になってみてください。では時間もないのでどんどんいきたいと思います。

これが、今皆様のお手元にある資料ですけども、簡単に飛驒の古墳の状況というものをお話ししておきたいと思います。飛驒の古墳は大体この三世紀といわれる時代に、結構いくつものものが固まっていると私は考えております。これは、殆どがですね、富山県のほうの、今の富山県ですね、方面の影響を受けたもので、おそらく富山県のほうから人が入ってきて、こっちの飛驒の方へ入ってきて古墳を作ったのではないかと考えられるぐらい非常に富山のものによく似ています。ところがですね、四世紀になりますと、飛驒では古墳というものがぱったりみられなくなってしまいます。これは富山平野でも結構人がいな

くなるということがわかっておりまして、どうも大洪水かなにかがあつて富山平野からも一気に人が減っているらしいということを言っている方がいらっしゃいます。それと一緒に動きをしているのかわかりませんが、飛騨では四世紀のものの古墳はないという状況です。すみません、ちょっと操作に不慣れで、で、最初にですね、ポイントとなる古墳をいくつかお示ししておきたいと思います。ここに、五世紀の初め頃に亀塚という古墳があります。これは国府にあります古墳ですけども、亀塚古墳、それからここに信包八幡神社古墳という古墳があります。これは古川の台地を少しあがったところですね。それからこう峠口古墳という古墳。それから三福寺町にあります小丸山古墳。この辺の4つを特に中心にお話していきたいと思います。

これは、広瀬町村大塚いちめい亀塚測量というふうに書いてありますけれども、岡村利平さんという国府の方が当時こんなふうな古墳が残っていたということを図に描いて残しておいてくれました。非常に巨大な古墳で、飛騨でしばらく間を置いて突然大きいこういう古墳が築かれるというものです。これは亀塚から出てきた兜ですね、イシバさん懐かしいですね、ハチガ先生とハチガ真弧まこと呼ばれるですね、時間がないのであれですけど、これハチガ真弧と通称言われておりまして、遺物の出てきたもののカーブを測るためのものなんですけれども、ハチガゼミに入るとですね、これをまず作らされるんですね。これでこういう曲線とかをガシャと当てて測るわけなんですけども、これがなかなか難しくてね、真ん中へんがどうしてもぶかぶかして、真ん中の竹ひごだけがスカスカになってしまうので、こううまく真ん中だけを切って締め付けて真弧というものにして、こういうのにも飛騨の匠の技が生かされていると。それは余分な話で、これは亀塚古墳の甲冑ですけども、非常によくできておりましてこの細かい部分を見ますと、ここなんですけれども、この鉄の兜というのは淵っこがですね結構尖がっていて、手が切れたりするとかですね体に当たると痛い。で、こういう角っこをですね革を巻き付けて、革の紐を巻き付けて、鉄の角が当たっても痛くないようにしておく。これは覆輪ふくりんというふうにするんですけども、そんなものも残ってありました。非常に残りのいいもの、イシバさんこれは誰かわかりませんが池田町のヨコマクさんっていう方なんですけども、亀塚古墳の甲冑もこうやって整理しております。これは図にしたものなんですけれども、こっち右側は鉄の刀、こちらは鉄の剣ですね、こっちは矢じり、これは胴体を覆うための武器ですね、防具、胴、短甲というふうについてますけれども、これも鉄の板を革でつなぎ合わせたものです。こういう図になっております。これも兜ですね、これは首の後ろを守るために鞆しころという、古典を習った人は鞆を引きちぎったなんて古典に出てきますけれども、首の後ろを守るための鞆で、こういう2枚の鞆というのは非常に全国でもそれほど数がなくて、時期も非常に限られる珍しいものです。これはその2段の鞆というのがいつの時代かなあというところを研究した人がいまして、古墳時代の甲冑の中でもこの2枚の鞆ってのはこの辺の時代にしかないよと、非常に限られた時期にしか出てこないものであるということがこれまでの研究でわかっております。兜の形はこの三角板の形ですのでこの三角板と2枚の鞆が重なっ

ているところってのは、もうこれ位しかないわけですね。非常に時期が特定できるという代物です。これは首を守る鎧なんですけども、これはよく分からない鉄の塊。で、ちょっと4ページ目、今日私がお配りした資料の4ページ目の中に上の段ですけれども、亀塚古墳と七観古墳の出土品の共通性というところが書いておきましたけども、これはほとんど時期が同じで、ほとんど同じようなものが副葬されているということを言いたいがためにこの図版を載せております。例えばですね、頭のとっぺんにあるヘルメットみたいなものがありますけれども、これもほとんど同じで、首の後ろを守る2枚で守るのも同じで、剣があつて刀があつて、この矢じりも非常に特徴的な専門家の間ではちようぜつぞく、鳥の舌の矢じりと書いて鳥舌鏃ちようぜつぞくというふうに言ってますけども、これもほぼ共通しているということです。あくびのよろいとはちょっと違うんですけどもあとは非常に似た形をしているというものです。で、この七観古墳がですね、どこにあるんじやいなということでございますが、この中にあります。ここですね。これは、百舌鳥古墳群という大阪の古墳群の図ですけれども、あんまり時間もないので細かい話はやめておきますけれども、色々文献のほうとこの実際の古墳の編年とが色々食い違っているところがありまして、今この大仙陵古墳という教科書によく出てくる仁徳天皇陵って昔言ってたやつですね、これが仁徳天皇陵になっているわけなんですけれども、この上石津ミサンザイというのがこの辺の中では比較的古くてですね日本書紀では仁徳、履中、反正という順番でいってますので、この履中陵というのが一番古いもんですからこいつがひょっとしたら仁徳じゃないかなというふうに言われていると。そこのすぐ側にあります七観山と書いてありますけども七観古墳とも言うんですが、こっから出てきたものと高山の国府町の亀塚の出てきたものがほとんど一緒であったと。この上石津ミサンザイ古墳は今は履中陵になってますけども仁徳天皇陵の可能性もあるということをお覚えておいていただいて真ん中のページに戻って頂ければと思います。これは2番目にお示ししました信包八幡神社古墳ですね、一番奥でハチガ先生が写真を撮っているところですけども、これも私実測調査に参加させていただいて古墳の測量でこの古墳を走り回り、この石室の中のたしかこっちの図面は私がとった図面を元にしています。出てきたものはちょっと新しいものもこの辺あるんですけども、私の見立てとしては六世紀の始めぐらいかなあなんていうことを考えております。この辺の鉄鏃なんかの中には少し古いものが含まれておりまして、ちょっと古くなるかなと考えております。これは国府の広瀬にありますこう峠古墳という古墳の図ですけど、昔から知られておりまして、これはサトウヤサトという人が描いた図ですけども、その図の中にも出てくると。これは航空写真ですね。あんまり余分な話はしんようにしましょうね。米軍撮影の航空写真で昭和の20年代の日本の様子をよく示す非常に貴重な航空写真です。ここに、こう峠古墳があるわけですね、で、一応墳丘の形はほぼ前方後円墳をしておりまして、大体この集合というのも大体この後ろのほうまでまわっているのではないかと。で、レーザー探査をして調べたことがありまして、そこでもこの古墳の横にまあラインがちょっと見られますが、ということで一応集合もまわっておるのではないかとということが

わかっております。あとは発掘調査に行つて確かめないといけないものです。これは中の石室で飛驒ではもちろん最大、県内でも、ほぼ最大ですかね、の大きさを持っております。で中にはこういった仕切りのような板も残っていると。図にするとこんな感じ。これは三福寺町にあります小丸山古墳という古墳ですけれども非常に細長い石室を持っております出てきたものはこんな感じ。この辺に年代から大体六世紀の第二四半期ぐらいかなと、25年から50年くらいの中の辺にはあるかなということでございます。これは馬の道具ですね、馬具ですね。ここら辺は耳につけるイヤリングみたいな、まあ穴開けるからピアスでしょうかね。これは弓矢の先、矢じりです。この小丸山古墳の近くにはですね、三仏寺廃寺というお寺があります。これはその軒丸瓦をちょっと表したのなんですけれども、この中に一番新しいものかなと私が考えている形式のこの2つの種類のものがありまして、この左側2つは三仏寺廃寺の瓦です。一番右は国分寺。これは考古学では型式学というですね、ものをこう順番にとりあえず並べてみましょうという考え方をするんですけれども、その中で考えていくと左から右へ順番に変化していつてのではないかと。例えばこの真ん中の部分が小さくなっていく、周りに点々が出てくるとかですね、そういうようなことで、この型式学的にこう追ってけるんじゃないかということの一つを考えております。で、もう一つはですね、それだけだとちょっと物足りないものですから、今度はこの屋根の軒の先を飾る、これは軒平瓦というものなんですけれども、この軒平瓦をみると、これもですね表面の模様が段々だんだん単純化していくと。これ右側2つは国分寺瓦窯といっている赤保木の窯跡ですけども、こっちは三仏寺廃寺からでてきたもので、しかもですね国分寺以外の古いものはこの下にだんこがあるんですけれども、一番新しいタイプのものだだんこがないということで型式学的には連続性があるのではないかということを考えております。で、これが何を示すのかということですけども、結論から言うと三福寺にいた人たちが赤保木町の辺りで瓦なんかを焼いたりして、それを自分たちの寺へ持ってくるのと同時に国分寺にも持っていつていたのではないかということです。国分寺はここですね、それから国分尼寺というのはここです。ここの前にはおそらく一本のその2つの寺を結ぶ大きな当時の官道のような道が通つていて、この2つを結んでいたのではないかというふうに考えられます。先程説明しました小丸山古墳はここで、こっちは横穴墓群がありましてこっちはちょっと変わったお墓が結構たくさんできています。で、三仏寺廃寺というのはこの辺にあると。それからこっちに古代の一大工業地帯でありました、こっちの山側のほうには瓦を焼いた窯跡があるということで、さらにここの道もちょっと怪しいかなというふうに思つておるわけなんです、こちら国分寺方面から三福寺方面へのルート、今の柏木工の社長さんのうちの辺ですかね、あの辺の横を抜けていくようなところかそれか長坂のほうを通つていくかちょっと分かりませんが、そちらのルート、それからこちら方面へは生産地へ向かうルートというのがありまして、そこを一直線に結ぶ道を作つて国分寺、国分尼寺を造営したのではないかということ、甲、想像力豊かに考えているところでございます。まあこういったものは色々検証していかないとはいけませんので、こ

れまた米軍撮影の航空写真ですけれども、国分寺と国分尼寺の前の通りはおそらく生きてるなあとか、さっきここを地図で示しましたけれども、もうちょっと南側にしっかりした道があるなあとか、こっちじゃなくてこっちを通っていたかなあとかですねそんなことをこれから検証していかないといけないという課題の一つです。で、この中で想像されるのがですね、飛驒の国造高市麻呂という人の文献に出てくるんですけれども、その方が国分寺に寄付をしたと、国分寺というのは国のほうで造れ造れという命令を出すんですけれどもなかなか地元でできないわけですね。その時にそこへ寄付をすればお前を中央で取り立てあげようということが行われるんですけども、飛驒の国造高市麻呂というのも国分寺を造るのにそういった協力をしまして、位をもらうわけですね。で、さらにその後造西大寺大判官という位までもらうんですけれども、高市麻呂と国分寺との関係がですね文献から分かります。さらに先程の中で、国分寺と三仏寺廃寺の関係性が伺われるということで、高市麻呂の本拠地ってのは実はこっちだったんじゃないかなあなんていうことを、ちょっと想像力豊かに述べるができるということでございます。あと2つちょっとお話をしておきたいと思えますけども、これは飛驒から出てきた、ちょっと一部長野県からのものも混じってますけども、馬具です。飛驒からこういった馬具が非常にたくさん出てきます、古墳の中から出て参ります。当時の馬をつかう技術というのが非常に盛んになっていたのではないかとということが考えられます。後、これは槍^{やり}鉦^{かね}ですね、飛驒の古墳から出てきたものなんですけれども、国府のウシロゴというところから出てきたものなんですけれども、こういったものも出ております。後2分で纏めないといけないんですけども、亀塚古墳というのはここにあります。先程申しましたように、大阪の古墳群の中でもこの上石津ミサンザイ古墳の横にある古墳のものとはほとんど同じ形のものでおるということで、ここで非常に強い関連性が伺われるということ。それから、ここにですね、継体天皇^{けいたいてんのうりょう}陵というのがあるんですけれども、この時に飛驒とどうも関係があったんじゃないかということが伺わせる文献が残っております。この頃に先程申した信包八幡神社古墳という前方後円墳があると。もう一つ敏達天皇^{びだつてんのうりょう}陵というのがあるんですけれども、その頃にもう飛驒共々関係があるらしいということが分かっているんですけれども、その時にこう峠口古墳という前方後円墳が飛驒にもあると。大野郡の大領の高市麻呂が国分寺に寄付をして、奈良で立身出世をすると、まあサクセスストーリーがあるわけなんですけれども、その三福寺のところには先程の小丸山古墳があると。この500年から600年くらいの間ってのは馬具、馬の道具というのが非常にたくさん古墳に納められまして、非常に馬をつかって色んなものを運んだりとか移動したりというようなことができるようになってくると。このウシロゴ古墳というところからは槍鉦が出てきておると。こういったですね、大阪や奈良、そういったところとの繋がりを持ちながら飛驒ならではの独特のこういった発展を遂げて、それが現在のひだがや、当時の奈良時代ですね、飛驒の匠制度に繋がっていったんだと。いきなり突然この飛驒の匠が出てきたわけではなくて、大阪の方面ですとか、奈良の方面、そういうところと関係性を持ちながら、飛驒の匠というのが登場してきたのではないかな

というところが今日の話したかったところでございます。ちょうど20分ということで私の講演を終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

《田中》 はい、ありがとうございました。吉村さんそのままもうちょっと待っててください。質問がありますので。家始さんどうぞ壇上で準備してください。今、飛驒が一番古い古墳亀塚ということで、亀塚の年代は5世紀でよろしいですか？

《牛丸》 ...の頭の方第一四半期ぐらいというふうに思っておりますけども

《田中》 はい、5世紀の頭と。で5世紀の真ん中といたしますとびと大塚でいいんでしょうか？高山の

《牛丸》 そうですね、それぐらいにしていたと思います。

《田中》 それであの、演題の飛驒の古墳の被葬者は誰かということで、ちょっと喋ってもらわなあかんですが、亀塚の古墳に埋葬されておりましたのは大和王権の関係者ということなんだと思いますが、大和王権から派遣されたその人か、大和王権から派遣されて、その二世三世ぐらいか、その辺はどうお考えですか？

《牛丸》 非常に複雑なんですけれども、上石津ミサンザイ古墳の上に七観古墳というのがあって、そこと関係があるというお話、そこと全く同じようなものが高山でも出ているということで、大王に、大王の周りに取り巻きがいるわけです。おそらく奈良盆地の辺にいたやつがくさいと思っているんです。和珥^{わじ}氏というのがいるんですけど、今でいうと安倍さんのところにいる菅さんとかですね、財務大臣誰でしたっけ、麻生さん。要は安倍さんが上石津ミサンザイ古墳の被葬者で、奈良の辺にいた麻生さんとかが飛驒とどうも関係を持っていたというようなイメージですね。

《田中》 そうすると、大和王権の関係する人という台地の、飛驒の土豪とかそういう人ではないわけですね？

《牛丸》 どっちかという飛驒の土豪が、この麻生さんと色々な関係を持って、手に入れたかなというふうに思っております。

《田中》 確定したことは分らんということなんですね。はい、ありがとうございました。遠藤さんどうですか、今の話わかりましたか？

《進行》 はい、なんとなくわかりやすい例えをいただきましたのでイメージできましたけれども、古墳の被葬者ってどうやって分かるのかなって推定されるのかなってところですが、様々な資料からこれだけいただいているんですね。

《田中》 甲冑とかね、副葬品なんかの傾向で、この古墳と奈良のほうの古墳これと同じとかそんなことが分かるわけですね。

《進行》 はい、分かりました。ありがとうございました。それでは、3人目の方ですが、家始義光さんです。

《田中》 家始さんは大阪の出身でございます。この大阪のほうから高山へいらっしゃいまして、そして日進木工でデザイン企画なんかをなされております。今回の資料も非常に

いいデザインで作られております。途中大阪弁が少し入るかなと、是非入れてもらいたいなと思うんですけども、伝説をそして飛騨の匠の民話の話を全国調べていただきました。

《進行》 それでは3人目は家始義光さんです。演題は「飛騨の匠のあしあと いまに残る飛騨の匠の足跡^{そくせき}と伝説をもとめて」でございます。よろしくお願いいたします。

3. 飛騨の匠のあしあと いまに残る飛騨の匠の足跡と伝説をもとめて

講師 家始義光

《家始》 家始義光と申します。よろしくお願いいたします。私のお話は、今日本各地に残っております飛騨の匠の遺構と、それと一緒に寄り添うように残っている伝説についてのお話になります。伝説の話なんで、堅苦しく捉えずにちょっと肩の力を抜いて聞いていただければいいかなと思います。まず最初にここに出ますけど、これは作りかけの資料でして、上まで、北海道まで下は沖縄までというふうに入っておりますけども、その中に飛騨の匠関わったものをポイントで印してあります。この水色のものが遺構ですね、紫のものが伝説で、赤いものが左甚五郎の伝説という形でポイントを入れていっております。これまだ途中の時にこういう形にしましたので、比較的少ないんですけども、この後すぐに左甚五郎を入れ始めましたら50ぐらいここからまたざっと増えてきますんで、そういうぐらい左甚五郎ってのは凄いなあというふうになんか思いました。まず最初に高山を出て、高山というか飛騨を出て、奈良、京都へ向かった飛騨の匠なんですけども、なんでこういうふうにならぬ日本各地にこういう遺構が残ったり伝説が残っているかということについてなんですけども、ちょっとだけ歴史的なことをお話しさせていただきますけども、718年に養老令が出まして、その中に武役令ということで飛騨国条が載っております、その中に飛騨から1年間の任期でおおよそ100人ぐらいということですかね、なんで武役ということで出せという話が載っております。ちょうどそういう人たちっていうのが奈良や京都の都の造営のために、年間350日とか330日とかっていう日数を働いたっていうふうなことが残っております、かなり過酷やったみたいですね。それで、そういうことに対しての匠が日本各地へ逃亡したり、あるいは地方の豪族であったり、そういう方たちから請われて地方へ赴いたりしてそういうものができたっていうことになります。ちょうど今718年の養老令で出ておりますので、ちょうど今年2018年なんですかね、300年にちょうどなるんですかね、そんな中で私がこうやって調べておりましたらいくつかの伝説についても雛形が見えるというのがわかってきました。その話をこれからさしていただきたいなと思います。1つ目の話なんですけども、とくにわの匠のが作りしものが動き出すという話を書いてあります。これ正確に言いますと匠が作ったものが動き出すことが主題になっているような物語ということになります。実は飛騨の匠にまつわる伝説を色々調べてますと、かなりの件数で匠が作ったものが動くってことが出でくるんですね。その中でもこういう動き出すものについての一番大きな特徴ってのが2つありまして1つは飛騨の匠の手下となって、例えば飛騨の匠が削った鉋屑であるとか木で作ったコップの

ようなものが、匠を助けて動き出すという動き方と、もう一つは左甚五郎にこれは代表されることなんですけども、作った作者の意思にかかわらず動き出すという、そういう2つのことがあるかなと思いました。ここに写っているこの写真については上野の東照宮の登り龍と下り龍っていうのが門の横にこう付いてるんですけども、門の写真はレジュメのところに、最初のところに小っちゃく写真が貼ってあると思うんですけども、そういう門の左右にこの上り龍・下り龍が付いております。この写真に、画像にあるやつは上り龍になりますね。なんでこれ下向いてるのに上り龍かっていう話なんですけど、これもまあ有名な話なんですけど、偉い人が^{こうべ}頭を垂れるってことで、これが登り龍ってことで決めてあるそうです。で、ここに残っている物語っていうのは上野東照宮さんでお聞きすると、不忍池が近いもんですからその池の水を飲みに行くってことが言われてるんですけども、さらに詳しくはその隣にあります上野寛永寺、そこの鐘楼のところに左甚五郎が龍を作ったとそういう話が残っております。それは結構有名な話で残っているのかなと思います。この2つ目、これはここに書いてありますけども、物語が幾重にも繋がっているお話。それで私は個人的には韓志和の話ってのが非常に好きで、本当に楽しいお話だと思いながら調べさせてもらってしてたんですけど、どういうふうに繋がっているかと申しますと、まず1つ目は飛驒の国分寺さんに韓志和の木造があると思うんですけど、そこに大明神縁起ってものも伝わっておりまして、その内容を見ると韓志和っていうのは飛驒の河合の天生で生まれたよってふうなことが書いてあります。そこで1つこの鶴に乗って唐へ渡っていくっていう韓志和の出自が分かる。その後なんですけども、国分寺さんの大明神縁起にも韓志和は飛驒を出て都に上ることが書いてあるんですけども、そのあと滋賀県の大鳥居というところで残っている伝説がありまして、そこは韓志和とか木鶴大明神という名前ではでてないんですけども、飛驒の匠がここで鶴を作って飛んで行ったというふうなことが伝わっております。ここで、飛び立っていった場所が分かる。で、そのあと唐へ渡りまして、中国の唐の時代のお話ですので、唐では杜陽雜編という^{とよざへん}蘇鶻撰という方が書かれている本があるんですけど、その中でちょうど^{ぼくそう}穆宗皇帝っていう皇帝の時代になるんですけど、その皇帝のところですごい技を披露したと。それで披露して喝采を浴びた後にどこともなく消えていったという話が残っております。そのあと韓志和は日本へ帰ってくるんですけども、その時に太宰府のところで、これは太宰府のほうに残っているお話では唐を出るときに怪しいと思った唐の兵隊ですかね。に弓を射かけられて、それは韓志和には当たらないんですけども鶴の羽に当たったというふうな話が残ってましてその鶴が頑張ってなんかこう日本海を飛んで太宰府まで来たときに力尽きて落ちてそこに鶴の墓ができたというふうなことが話として残っている。これは、この話はまだ続きがずっとあるんですけども、それぞれの地に同じような話が残ってるんですけども、それぞれが違うパートを受け持っているっていうのが非常に面白いと思うんですね。ちょうど遣唐使もその頃向こうに行っている時代ですので、そんなことも関係があって、おそらく遣唐使の通っていく道っていうのは瀬戸内海を通ってずっと抜けていきますから、そんなルートになるのかなという

ふうなことを想像しながら、私はこれを楽しみにいいなと思います。その次、これも幾重にも繋がるということ saying いいと思うんですけども、鞍くらつくりのとり作止利でんせつ伝説、これは飛驒にはやはり同じ、これも先ほど申しました韓志和と被ってるんですけども、天生峠でやっぱり生まれてという話が残っております。これも私実はある限り調べてはいないんですけども、調べていくと非常に面白い。その右側の写真、下のほうに四角い屋根の尖がっている屋根のお寺が写っているんですけど、あれが飛鳥寺になります。ちょうどあまかしのおか甘櫨丘あまかしのおかという丘がすぐ傍にありまして、その丘から見下ろすとこういうふうに見える、本当に飛鳥の情緒が感じられる、いいところだなと思います。で、ここにはちょっと写真は無いんですけど2つの話を載せさせていただきました。1つ目はこれ、割とどちらも短い話ではあるんですけども匠が騙されて賭けに負ける話。これは簡単に言いますと翌日の朝までに建物を建てれるかっていうふうなことを村人であったり天邪鬼とかと賭けをします。で、見てると匠の仕事ってのはすごく早くてこのままではどう見ても翌朝までにはできてしまう。それをちょっとこれは困ったと思ってその賭ける相手がコケッコウという鳴き真似をすると飛驒の匠がこりゃあ朝になって間に合わなかったということで諦めて仕事を投げ出してってしまうというようなお話なんですけども、これも結構かなり沢山地方に残っているんですけど、短い話で、どういうことを言いたかったかのかなって言うのは私もまだ研究中です。その横ですね、右のほうですけど、匠が失敗して家人に救われる話、これはちょっとこれだけ詳しくお話しさせていただきたいなと思います。飛驒の国分寺さんにオオイチョウがあって、右のほうに三重の塔が今あるんですけども、その三重の塔、これは昔は七重の塔やったという話なんですけども、その七重の塔に纏わるお話で国分寺さんにも伝説が残っております。これは飛驒の方はよくご存じだと思うんですけど、七重の塔を建てる時に大事な柱を棟梁が間違っあて短く切ってしまうと。棟梁の弟子だったかな、が切ってしまうと。それをなんとかしならんと思って困っているところへ娘が柱は柱でも切ったものは仕方がないので柱の上に枘組を加えて、外観、美観を備えるようにしたらどうでしょうということをやってみるとすごく良かったと。それで非常に好評を博したんですけども、棟梁としてはやっぱりさすがに娘のアイデアでやったとは言にくいもんですから、結果的にその棟梁は娘さんを殺してしまうような形になってしまう。で、その死体を丁度埋めたところに植えてこのイチョウがオオイチョウになっているというようなお話が残っていると思うんですけどもこのイチョウも飛驒にとっては、皆さん、私は飛驒のものでないんですけども、このイチョウの葉がいつぺんに落ちると早く寒くなるとかそういうふうな言い伝えがあって、そういう意味では非常に今でもこの伝説に纏わるものが現代に生きてるといってふうなことを感じます。それとよく似た話なんですけども、1つだけここで紹介させていただきたいなと思うんですが、京都に大報恩寺千本釈迦堂というお寺があります。これも非常に古いお寺なんですけども、ここに今お話ししたようなお話が残っているということなんです。これが左側が千本釈迦堂の参道になって、これが参道の門を潜った向こう側ですね、右が。ここでお話として残っているのはおかめさんという伝説が残

っております。これどういうことかと言いますと、これは千本釈迦堂さんに残っている由緒をちょっとそのまま読みさせていただきますけども、鎌倉時代の初め西洞院一条上るの辺りで長井飛驒高次ながいひだのかみたかつぐという洛中洛外に名の聞こえた棟梁とその妻お亀が住んでいた。おかめというのは阿に亀と書いておかめと読みます。その頃義空上人が千本釈迦堂の本堂を建立することになり、高次がその棟梁に選ばれ造営工事は着々と進んでいきましたが、高次ほどの名人が千慮の一失というべきか信徒寄進の四天柱の一本を誤って切り落としてしまった。の毎日を過ごしている夫の姿を見た妻のおかめは古い記憶を思い出し、いっそ枅組を施せばという一言、この着想が結果として成功を収め、見事な大堂の骨組みが出来上がったのです。安貞元年、これ1227年なんですけども、12月26日げんしゅくの上棟式が行われたが、その日を待たずしておかめは自ら自刃して果てたのです。女の提言により棟梁としての大任を果たしえたということが世間に漏れ聞こえればこの身は一層夫の名声に捧げましょと決意したのです。高次は上棟の日、亡き妻の面を御幣につけて飾り、冥福と大堂の無事完成を祈ったといわれております。このあと、このおかめについては今でも年に1回なんですけども、このおかめさんを祭る催しがずっと開かれているということなんです。これが堂内の様子です。ここは実は撮影できないところなんですけども、撮影させていただいてきたんですけども、日本全国から奉納されたおかめさんのお面であったりとか小さい塑像ですね、そういうものをずっと大事に展示されているのと、もう1つは堂内の上のところ額に絵が入りまして、高次とおかめさんの一連の話が絵入りでずっと紹介されております。この中で今私が最初に申しました中では飛驒高次ひだのかみたかつぐっていうふうに申しましたけども、こちらの中にあるこの説明文では飛驒匠ひだたくみのかみってなってるんですけども、それはちょっとどういうふうなのかなと思います。ここで非常に私がこれはいいことだなと思ったのはこれもう1つここにあるんですけど、先ほどお話しました上棟式の話に出て来ましたが、おかめを御幣に付けて上棟式の飾り物とか柱にあげたって話が出てきましたけども、この話ってのは今でも京都を中心に大工さんの中では受け継がれているところがあるってことなんです。そういう意味では飛驒高山の国分寺のオオイチョウの伝説も現代に生きておりますし、この大報恩寺千本釈迦堂のおかめさんの伝説、これについても現代大工に受け継がれています。大工ってというのは文字通り飛驒の匠は元々大工ってということでもありましたもんですから、大工がこの飛驒高次のあげた上棟のこの御幣ですね、を今でも大事に守って今でも使われているところがあるというのは、これは私の考えなんですけども、ある意味ではその飛驒の匠に対してのその思いもあるのかなというふうに思っております。私の話は一応以上なんですけども、1番最初にご覧いただきましたこの地図なんですけども、私実は色々こういうことを調べてポイントに入れていく中でどうしても遠くのところに飛驒の匠の伝説であったりとか飛驒の匠の遺構を見つけてもなかなか実際に行くことってのが非常に難しいことがあります。そういうときに最近非常に便利になっておりまして、こういう地図を実際の航空写真のような画面で見れるようなサービスが今あるってのはご存知の方も多いと思うんですけど、そういう形にして実

は見てみてそれをグッとこう伸ばしてきて、そうすると実際の道路の状況が航空写真の状態で見れますし、あとここのこのサービスではストリートビューっていう街の中へ入っていくような状態でも見れます。そういうふうな形にしてあらかじめ匠の遺構がある所の様子を調べておきましてそれからいつか行ける時が来たらそこに行ってみると本当に行ったことが伊豆に一回来たことがある感じとさえいえるんですかね、そういうのを楽しめるっていうんですか、非常に懐かしいところに来た気分になりますので、どこか遠いところであっても今私をご紹介したようなそういう行き方もありますのでそういうことも参考にして飛驒の匠の遺構を訪ねられたらどうかと思います。私の話は以上になりますありがとうございます（拍手）

《田中》 はい、ありがとうございました。家始さんちょっとそのまま金井さん登壇して準備をお願いします。家始さん、日本に残ります飛驒の伝説・民話そういったものを全部調べていただいてそしてほんの一部だけ今回紹介をしていただきました。国分寺の千代菊、案を出していただけるのはいかんということで、自害したか殺されて埋められて国分寺のオオイチョウの根元に埋められて、オオイチョウがすごく大きくなったと。そして枝垂れイチョウというそういう伝説があるわけですけど、こういった建築儀礼に関わる伝説ってのが全国にいくつもありまして、その中でこの国分寺の千代菊の話ってのも1つあるとということなんですが、この似たような話で千本釈迦堂のおかめというのがあるんですね？

《家始》 そうですね、はい。おかめの話も本当に今申しましたみたいに現代に生きている。それと実際にしかも大工さんがそれを受け継いでいるというところにすごく意義があるなあと私は考えます。

《田中》 家始さんは大阪のほうからIターンでいらっしやいまして、そして家具会社のほうに勤めておられますが周りの方はこの家具、飛驒の匠ばかりだと思うんですけど、飛驒の匠ってのはどんな感じでしょうか？

《家始》 そうですね、実際私も高山に来るまでは実は飛驒を非常によく知ってまして、その次に飛驒の匠ってのがやっぱり大阪におっても聞こえてくる言葉ではありました。ですから非常にここにこういった ??? (1:06:04~)

《田中》 はい、ありがとうございました。それでは次、金井さんでございまして、金井さんも昨年まで家具会社のほうに勤めておられまして、今東京のほうへ行かれております。金井さんはスマホで飛驒の匠の史跡を回ろうということで色々今用の飛驒の匠の楽しみ方ということで頑張って調べられました。そういったお話を今日してもらおうと思うわけけども、はい。

《進行》 それでは4人目です。金井桂男さんです。演題は飛驒の匠が残した遺構を歩くスマホ片手に週末散歩です。よろしくお願ひ致します。

4. 飛驒の匠が残した遺構を歩くスマホ片手に週末散歩(1:07:00~)

講師 金井桂男

《金井》 今紹介いただきました金井です。最近色々ガイドブックとか書店に行くと色々あると思うんですが、なかなかこういった飛驒の匠とかこういう特定のものに関するピンポイントで解説したようなガイドブックってのは中々ありませんのでホームページとか今色々三次元の復元画像とかそういったものを利用したアプリとかガイドページが色々出てますのでそういったものを利用して実際に訪ねながら飛驒の匠を理解していこうというようにそういったことを考えております。まず飛驒の匠っていうとイメージとしては皆さんどんな感じを受けますでしょうか。色々漠然としたイメージとか、左甚五郎とか、大工、棟梁とかそういったイメージが主かとは思いますが、司馬遼太郎の街道をゆくなんか見てみますと飛驒の匠という伝承のたゆうのかかったような言葉は私どもには魅力的である。その国は俗界から離れている上に、人はみな名人上手に違いないとなどという童話のような思いが私どものどこかにある。っていうような表現をされています。また江戸時代になりますと、本居宣長っていう国学者がいましたが、玉勝間っていう本の中で飛驒の匠について随筆ですが述べた文があります。飛驒の匠ってのは古より飛驒の国より色々沢山の匠が出ていたことによりまして、江戸時代ですがもう飛驒の出身でなくても飛驒の匠でなくても飛驒の匠っていう言葉を使っていたというそういった研究というか随筆が残っております。飛驒の匠っていうと大体4種類ぐらいに時代として追っていくと分かれるかとは思いますが、元々は日本初期に5世紀頃両面宿禰っていうような伝説っていうのが書かれております。そこで飛驒が出てくるのは一番初めかとは思いますが、その頃は杣匠そまだくみ、飛驒森林が多いので、そこで杣のような森林を扱ったり建物を建てたりとか森林技術者、建築土木の技術者っていうようなそういった棟梁がいたのではないかとそういったような想像ができます。その頃5世紀頃飛驒にも色々亀塚古墳のような古墳がありますのでそこから出土してきた鉄剣や甲冑とかそういったものを照らし合わせますとその頃から朝鮮半島との繋がりがあったのではないかとそういったことが伺えます。そこから飛鳥時代になりますと、先ほども出てきましたが止利仏師、飛鳥大仏ですとかそういったものを建てた河合村の止利仏師誕生伝説そういったものが残ってますが、そこも渡来人との関わりってのが大きかったのかなとそういったような感じを受けます。奈良時代、平城京とか平安京その頃になりますと飛驒国条ひだのくにじょうという法律で飛驒の匠の年間100人程都に徴用されて土木技術ですとか建築技術が、そういったものを都の造営に使われていたとそういった時代があります。大体飛驒の匠の制度ってのは大体平安時代の終わりごろになると自然に消滅していってしまうんですが、この辺までが大体集団として制度として法律として飛驒の匠が存在したというそういった時代となるかと思えます。中世以降になりますと、朝廷の力も飛驒の匠を徴用するという力も無くなってきますので、公的な記録からは飛驒の匠という言葉が殆ど出てこなくなります。それに代わって武士の時代とかなってくるんですが、その中で藤原宗安ふじわらのむねやすっていう名前が出てきます。飛驒の大工としては初めて飛驒権守ひだごんのかみっていう地位を拝領して飛驒の大工の始祖とされている、そういった人物です。この時代からは個

人の交渉とか棟梁として全国の建築ですとか寺社建築に携わるようになるのかなと思って
おります。で藤原宗安という人物ですが、どういった人なのかっていうのが国分寺のほう
に藤原宗安像とされるものが残っております。鎌倉時代に実在した人物でして、飛騨の匠、
鎌倉時代の飛騨の大工として初めて飛騨権守を名乗るということです。郡上市の長瀧寺の
大講堂ですとかそういったものに実際名前が残っています。それともう1個国分寺のほう
に木鶴大明神の像が残っているんですが、これは先ほども出てきました韓志和の伝説で中
国に自分で木で作った鶴の像に乗って飛んだというような物語が江戸時代に書かれてます
が、国分寺ではこの木鶴大明神と藤原宗安、これが同一の藤原宗安の肖像として木鶴大明
神の像が作られたというような説が残っております。匠様というような呼び名で飛騨の大
工からは始祖として崇拝されているということです。歴史の資料の中に色々藤原宗安です
とか飛騨の匠そういった名前が所々に出てくるんですが、それについてちょっと何件か例
を出してみたいと思います。1つ目はこれ実際に存在した人なんですが、松本のほうで松
本市の屋台保存会だよりというところに出てたんですが、屋台の棟木に『棟梁 飛騨匠
やまぐちごんのかみ
山口権之正 藤原宗次』というように墨書されていたのが発見されています。山口権之正っ
ていうのは高山市のかんしやうかん煥章館の鷹の彫刻で名前が初めて出てくるんですが、それで実際にい
た人で松本のほうで随分いろんな建築、寺社建築を残されています。こういった実際に存
在した方の墨書ってのは信頼できるんですが、他にブランド的な肩書として飛騨の匠です
とかそういったものが使われているというのが結構あります。で、駿河志料、静岡県です
が、久能山の東照宮、ここに五重塔今現存していないんですが、五重塔がありましてそこ
の調べた書物の中に飛騨の匠十五代というような形で実際この棟梁はおそらく幕府付作事
方大棟梁の甲良左衛門宗次だと思われるんですが、この人おそらく飛騨の出身ではないと思
います。近江のほうの甲良家の出身だと思いますのでブランドして飛騨の匠っていう名前が使われ
て記録に残っているのではないかと、そういった感じが伺われます。またもっと古いところ
ですが、奈良の西大寺の鉄宝塔というものがちっちゃく写真に載ってますが、こういったものが国宝
で今奈良の国立博物館にあるんですが、奈良とか京都のこういった国宝とかいろんな文化財、今
文化財ですが江戸時代こういったお寺の宝とかそういったものを調べた記録とかありまして
やしろひろかた
屋代弘賢という江戸時代の幕府の御家人ですが、国学者でずっと歩いているんなものを調べたよ
うなんですが、その中で西大寺の鉄宝塔の柱ですかね、そこに大工藤原宗安の文字が刻まれてい
たとそういった記録を残しております。これは実際に飛騨権之正の藤原宗安かどうかってのは
ちょっと定かではないんですが、こういった記録も残っています。ところで旅はお好きでしょ
うか？飛騨の匠ってのは色々法律で定められて奈良へ徴用されて行って旅をしたりとかその後ま
た色々個人の棟梁ってような時代になってからは全国で寺社建築とかいろんなものに関わ
って色々なところに旅をしていたと思われま。旅っていうのはなんだろう。広辞苑のほうで
調べますと住む土地を離れて、一時他の土地に行くことを旅行とか今いたところから離れるっ
てことを全部旅だと広辞苑のほうでは書いております。柳田邦夫なんかでも旅っていうのは現代は
電車とか色々楽に旅ができますがこの時代についてはその日の食糧ですとか寝るところとかそ

ういったものもその日に調達しなくては行けないと。なかなか命がけの旅であったと。楽しい景色を楽しむものとはかけ離れていたというようなことを述べております。旅っていうのも色々分類をしてみました。が、享楽型の旅、楽しみの旅とか観光とか、まあ一般に皆さん私とかもやるような旅だと思うんですが、責務型の旅、強制的に徴発されていくような旅税金を納めるための旅とかそういったものがあると思います。あと寅さん型の旅、現実逃避ですかね。成り行き次第でリフレッシュしたりとかそういった旅だと思います。あとは信仰型の旅として布教ですとか巡礼ですとか修行の旅とかそういった感じになると思うんですが、飛驒の匠はどんな旅をしたのか。おそらく2番目の責務型の旅ということでもかなり苦しいことが多かったかと思えます。今お配りしますレジュメの中で、古代の官道と飛驒の匠が通った道と簡単に地図を作っておりますので、道の、この時代は七道駅路といいまして全国が7つの道路に沿ったような地域で分かれておりました。この中で、飛驒の匠が都へ行くために通った道っていうのは右側の飛驒に匠が通った道、東山道の飛驒支路っていうようなこんな行程でして大体平安時代の延喜式によりますと上りが14日、下りが7日で平安時代のものでありますので奈良時代ですとこれにあと1日か2日プラスされるのかなというところで平城京藤原京まで行ったのではないかと思われまます。法律で斐陀国条ということでこれで毎年100人程都へ建築とか従事する度に来なさいというようなことが定められております。ここで飛驒の国というのが法律で定められておまして、法律でこういったことを定められるのは飛驒の国が全国で1つだけです。あと実際に飛驒の匠の遺構を訪ねるということで、時代ごとにこういった形で色々分布が分かれています。が、古墳時代から奈良時代その辺に對しましては大体都の中心ですとかその周辺のものやっぱり多くなっております。一番初めに千光寺の両面宿禰像ですとか、そういったものが出てくるんですが、大体飛鳥周辺ですとか、それから平城京周辺、奈良唐招提寺ですとかそういったところが大体地域ごとに固まっているのかなという感じを受けます。平安時代の終わりごろになりますと飛驒の匠制度がだんだん消滅しますので、ここからはちょっと全国に個人の棟梁として散っていくのかなとそういった印象を受けます。飛驒のほうにも中世以降ですとか、荒木神社の本殿ですとか、安国寺の経蔵、久津八幡宮ですとか照蓮寺の本堂ですとか色々かなり建築的にも高い技術で作られているっていうものが沢山見受けられます。あと滋賀のほうですとか西明寺ですとかそういったものも大分五重塔かなりきれいな建物です。ので行ってみるとかなり迫力あると思います。あと埼玉ですとか東京ですとかそっちのほうにも色々寺社建築散らばっておりますので、たまたま興味があれば行かれるとよろしいと思います。あと近代になりますと高山のほうでも日下部住宅ですとか吉島家ですとか色々観光地として色々ガイドブックに出てますが、たくさん建築が残っております。これからスマホで飛驒の匠の遺構を訪ねるっていうような試みをするんですが、数年前に『ポケモンGO』とかそういったものがちょっと話題になりましたが、現実の世界に仮想的な画像ですとかそういったものを照らし合わせてスマホですとかタブレットですとかそういったもので実際に見ながら活用してみるっていうのが最近面白いまた新しいガイドの仕方ではないのかなと思っております。ヴァーチャル・リアリティーですとかオーグメンテッド・リアリティーですとかそういった専門用語もありますけれども、色々検索すると出てきますので利用してみたら面白いと思

います。活用例としましては、京都の羅城門なんですが、羅城門跡地に『よみがえる羅城門』つというような看板が立ってまして、そこにスマホのQRコードの読み取り機能を使いましてQRコードを読み取ると右にあるようなこんな画面が出てきます。この画面から色んなこと出来るんですが、一ヵ所地図のところを選んでみると、下の左側ですがこんなようなマークが出てきて実際にその場所に行ってスマホをかざしてみると、右側に出てるようなこんな再現画像が表示されて360度こうやって回ると動いて見えます。実際に復元された建物のその場に行って見ながらこんなものがあったんだというようなそんな体験ができるといったようなそんなアプリです。また市販されているものだと、東寺なんか行きますと300円でARガイドブックなんていうものが売ってまして、これをスマホで読み取ると実際に音声、ガイド音声流れまして、実際の仏像のかなり近いところで見たような画像が手元で確認できると、そういったものが今あります。スマホのアプリをダウンロードしていただきますと、奈良の平城京歴史ぶらりマップみたいなこんなものもありまして、これをダウンロードしてホームページからダウンロードして使うんですが、下側の左側のような実際の地図にこんな史跡の場所がありますよというような地図が出てきてそれぞれをクリックしていくと、これもまた再現された再現画像ですとかそういったものが出てきます。同じようにそれぞれ色んなポイントがありまして、ここのそれぞれのポイントについて混成画像ですとかまた細かい漫画みたいなものですかね、そういったものとか色んな解説が一般のガイドブックでは載ってないようなそんな画像が詳しく出てきますので実際に現地でそれを確認しながら見ていただくというのなかなか面白いかなと思います。これは平安京のオーバーレイマップっていうのを立命館大学のほうで協力して作られたんですが、Googleの実際の京都の街並みに平安京の古い平安京ですとかそういった周辺の地図を重ね合わせて教授されて実際に今どこにいるのか平安京に落としてみると実際どの辺を歩いているのかといったことがひと目でわかるような地図になってます。これも実際ダウンロードして現地で表示して確認しながら歩いたり訪ねたりとかそういったことが体験できますので地図見て今どの辺かなとわからず歩いているよりもこういったものを見て歩いてもらったほうが実際に距離感ですとかスケール感っていうのが歩いて体験できますのでなかなか面白いなと色々感じます。こういったものも最近新しく出てきましたので市販のガイドブックですとかそういったものにはなかなか掲載されてませんので色々検索して使ってみると面白いです。関連した施設としまして、京都市の平安京創生館に行きますと飛驒の匠が関わったといわれる豊楽院、豊楽殿の模型ですとか実際の平安京の、これが1000分の1ですかね、1000分の1のこういった模型とかありますので、なかなか凝った作りをしてましてよろしいかなと思います。あと飛驒の高山ですとかこういったものにつきましては市のほうで作られているホームページですとかそういったものにも詳しく出ているんですが、岐阜女子大さんのほうでデジタルアーカイブで飛驒おうらいとかそういったものを作られてますのでホームページのほうで閲覧していただくと上にあるような画面が出てきて、そこを辿っていきますと歴史のところとか自然とか文化とか色んな項目がありまして、それぞれの項目について細かい解説が出てきます。こういったもので現地でまた確認しながら見たりですとか事前の情報を得てから行ってみたりとかそういったことでなかなかガ

イドブックなしで訪ねるよりはいろいろ理解していくには助けになるのではないかとそう思ったと思います。関連情報としましては、飛騨高山匠の技とこころっていうようなデジタルアーカイブも作られているようですので、そっちのほうもかなり詳しく色んな以降ですとか文化、飛騨の匠について解説されていますので、まだまだこれ完成ではないと思うのですがいずれはこういったものも閲覧できるようになるとと思いますので、将来的には利用して色々回っていただければ飛騨の匠についてもっと詳しく実際に知っていただけるのではないかといいことを思っております。実際スマホを使って辿ってもらってというのは大体これで内容としては終わりなんですけど、なかなか色々部分的な建物ですとかそういったものに対して詳しく断片的に解説されているものは結構あるんですが、通して時代を追って飛騨の匠について知るっていうのはなかなか手ごろな資料っていうのが見つかりませんで、実際に歩きながら年代別に追って訪ねてみるっていうのも、飛騨の匠の歴史ですとか、残した業績ですとかそういったものを理解していただくには非常に良いですし、また、週末ちょこっと訪ねたりして行ってもらうのもなかなか良いのではないかと思っております。私のほうはこれで以上になります。ありがとうございました。(拍手)

《田中》 はい、ありがとうございました。金井さんもうちょっとこちらへ。野尻さん登壇の準備をお願いします。今金井さんにこのスマホ片手にということでもっと案を出していただきました。それで、お配りしておりますこの資料、ここら辺もこのバーコードと連動をしましてみえるように、ここどうでしょうか1年半くらいで実現するんですね？

《金井》 そうですね、大体バーコードを作っていくまして、それで細かいところを検索したりして解説を見られるようにできればいいかなと思っております。

《田中》 はい、金井さんはすみません、出身はどちらでした？

《金井》 僕は群馬県です。高崎です。

《田中》 そうですか、こちらとしてはあなたどこから来んさったかなとかどうしても気になるもんですから、それで今東京のほうへ戻られているんですね。この1年半くらいでこれだけのまとめをされたってこと、非常に正確な資料を作られてすごいなと思うんですけど、やはりこれはインターネット、そしてまたパソコンのそういったものでやったってことなんですね。

《金井》 そうですね、結構パソコンで検索すると、単語を入れるだけで色んなものが出てきますんで、そういったところで思ってたようなものも出てきたりとかそういうところで色々広がっていくのが今面白いかなと思っております。

《田中》 なるほど、大体20年か30年かかってようやくこういうまとめという、そういうところやったんですが、早いですねさすがに。遠藤さん、金井さんが旅行は4つの種類に分けられると言いましたが、何か享楽型とか、そして寅さん型とか、責任型とか、遠藤さんはどうですか？

《進行》 寅さん型ですかね。

《田中》 じゃあ寅さん型だそうです。ぶらぶらと。

《金井》 僕もそうです。

《進行》 そうですか、良かったです一緒に。

《金井》 はい、ありがとうございました。

《進行》 ありがとうございました。